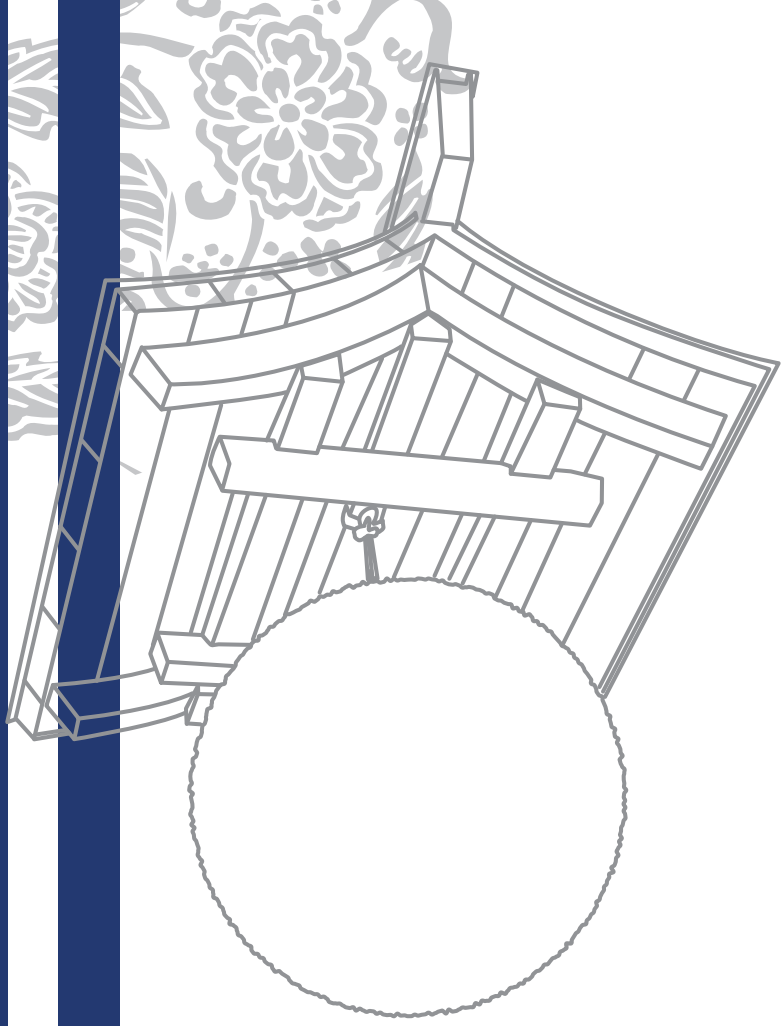
朝日酒造

酒を造る里のものがたり



平成22年2月
13日(土)・14日(日)
開場　13時半　開演　14時
会場　朝日酒造エントランスホール
主催　朝日酒造株式会社

ご 挨 拶

「酒屋唄」公演に向けて　　朝日酒造株式会社 社長 平澤 修

本日は何かとご多用の中、又お寒い中、お運びいただきありがとうございました。

平素は格別のお引き立てを賜り厚く御礼申し上げます。

このたび、日本で初めての、現代における酒屋唄継承のための企画「酒を造る里のものがたり」が上演されることとなりました。酒屋唄は、酒造りの伝統の技を、声で象徴しているだけでなく、「唄半給金」と言われたように、声を出す事が、仕事をするための必須の道具でもありましたが、時代の変化とともに、この唄を歌う必要がなくなり、現在消えかかっている状態でした。

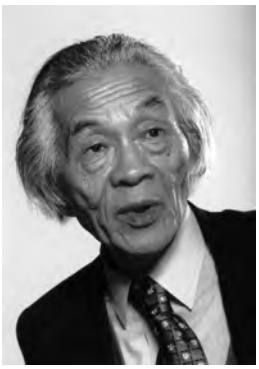
弊社では、当時、専務取締役であった嶋先生の時代に、「酒造り唄を歌い継ぐ会」を発足させ、弊社に伝わる「朝日流酒造り唄」の伝承と研究も行ってまいりましたが、このたび、茂手木潔子先生の企画・構成で、新しい形として伝統を受け継ぐこの作品が出来上がりました。この作品の実現で、酒造りにとって、もっとも重要だった唄の伝統が、時代を経ても歌い継がれて行くことを期待しています。

本日の公演にご尽力くださいましたに作曲家の菅野由弘先生、合唱指導の山本義人先生、舞台担当の皆様方に衷心より御礼申し上げます。特に、朝日酒造エントランスホールに、うだるような暑い夏の日も雨や極寒の雪が降る日も、一年間練習に通ってくださった合唱団の方々の大変な努力と熱意に対して、厚く御礼申し上げます。

酒造りは、技に秀でた日本の伝統文化として位置づけられるものと考えます。朝日酒造は、今後も、酒造りを通して、地域の文化、日本の文化を大事に守り継承してゆきたいと考えています。

今後とも何卒、御支援の程よろしく御願い申し上げます。

嶋 悌 司（監修）



私が酒造の作業唄を知ったのはほぼ60年前のことであった。

この時期は酒造りの最盛期であり、最も付加価値の高い吟醸酒が仕込まれる。今は、大部分の酒蔵では通勤制だろうが、昔は殆んど出稼ぎで蔵で寝泊りして、まだ真暗な寒い朝、酒男達は寝不足で赤い眼をして、ひきしまった空気の中をかけまわっていた。勇壮で力強く、家郷を離れた淋しさもかかえながら、仕事をするこの酒造唄にふれた時、何とも云えぬ感動をおぼえたものだった。

時代が変わり、機械の導入で作業が変わった。作業唄は作業が変われば歌えなくなる。酒蔵の宴会だけで歌われるようになった。それが淋しかった。まだ歌える人がいるうちに専門の人達に調べてもらっておくべきと考え続けていた。

16年前、癌で入院、退院して間もなく、国立歴史民俗博物館の小島美子先生の退官記念の会が早稲田であり、出かけてお願いをした。「いい人が今度上越教育大学にゆくから、あの方がいい」と茂手木先生を紹介していただいた。茂手木先生はその場で了解してくださった。

精力的な活動をなさる先生は、調査・研究・杜氏達の組織化、そして、遂には映像化、CD化、更には海外に連れてゆくなど実に大きな活動をやって下さった。上越から東京に転じられてからは、今回の発表の企画やら何やらご提案いただき、100%の手配を御願いすることになった。

作曲の菅野先生、合唱指導の山本先生共に、ご多忙の中かけつけてご指導下さった。合唱の皆さんの懸命なご努力にお礼を申し上げたい。私には生きているうちに発表を聞けることは何とも云えない喜びだし、夢中でがんばった西脇さんにご苦労様と云いたいし、後でがんばらせた平澤社長にありがとうございましたと申し上げる。

《嶋 悌司（しま・ていじ） 監修》

1929年新潟県新発田市生まれ。旧制新発田中学校、宇都宮農林専門学校(現宇都宮大学)農芸化学科を卒業。1950年、新潟県醸造試験場に勤務、1977年第11代醸造試験場長に就任。この間、「あかい酒」の開発で日本醸友会技術賞、中小企業庁長官賞、新潟日報文化賞(産業部門)を受賞。「新潟清酒学校」の設立運営をはじめ後継者育成の功績で日本醸造協会「石川弥八郎賞」を受賞。地域の米、水、人で譲す「淡麗辛口」の指導普及に努め、新潟清酒の地位を築いた。1984年、朝日酒造株式会社に工場長として入社。「久保田」「越州」などの銘酒を造る。常務、専務、参与を歴任して2003年退任。酒造りには携わる人の和、環境保全が大切、の理念を貫き通す。

現在、公益財団法人「こしじ水と緑の会」理事。単著に『嶋悌司 酒を語る』（朝日酒造）がある。

プログラム

1.　混声合唱《酛すり唄》　音頭:山本義人

2.　朗読「酒を造る里のものがたり」①　朗読:川上孝一

3.　酒屋唄《総起き　流し唄　桶洗唄　数番唄》　蔵人たち

4.　女声合唱《数番唄》

5.　混声合唱《桶洗唄》

6.　酒屋唄《米洗唄　酛すり唄　数番唄　二番櫂　三ころ　切り火》

＜休憩15分＞

7.　混声合唱《米とぎ唄》

8.　男声合唱《仕込唄》

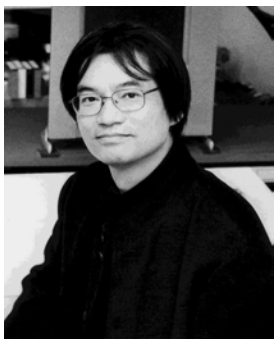
9.　朗読「酒を造る里のものがたり」②　朗読:川上孝一

10.　蔵人・混声合唱《酛すり唄》

11.　女声合唱《数番唄》

12.　混声合唱《三ころ》

作曲ノート　雪の中の酒屋唄　　菅野 由弘



今年は、雪が多い。雪の多い年は旨い酒が出来ると聞いた。気象条件が厳しいほど、良い酒が出来るとすれば、杜氏の労働がきつい時ほど、旨い酒が出来る事になる。

杜氏が労働歌として歌う「酒造り唄」が、なかなか素晴らしいものである、という事を、今回の企画、構成をしている茂手木潔子さんから聞き、実際に録音と映像で耳にしてから、既に10年以上を経た。確かに素晴らしいものであることは間違いない。伝統芸術に入るのか、芸能に入れるべきか、そう考えると、先ず「伝統」とは何か、という問題に突き当たる。越路、野積、吉川、柿崎といった近在各地の「酒屋唄」を聞いてみると、元は同じであったかも知れないが、それぞれがかなり個性的に変質している。歌うことが目的ではなく、労働に付随して、仕事の能率を上げるため、仲間同士の息を合わせるため、眠気を吹き飛ばすため、寒さと寂しさに耐えるために歌われる唄ならではの「変化」が見て取れる。そうした変化を内包した「伝統」をどう捉えるべきか、色々と考えさせられ、その魅力に取り憑かれていた。

そんなある日、この酒屋唄を元にした合唱曲を作曲しないか、とのお話しを頂いた。酒造りも近代化の波が著しく、労働歌としての役割を終えつつある酒屋唄を、何とか残したい。しかし。本来変化すべき「伝統」の酒屋唄を、ただ残したのでは、その意義が半減してしまうので、未来に伝え残すためには、そこに何らかの「現代」を加える必要がある、と言う。これは正に慧眼というべきであろう。博物館に残す伝統ではなく、生き続ける伝統を目指すために、かつての姿に学ぶと同時に、現代のスタイルの合唱曲を作り、両者が同時進行することが必要だ、という発想に賛同の意を表したい。

曲は、混声４曲、女声1曲、男声1曲からなる6曲の組曲となっている。原則的には、仕事の順に添って演奏することが望ましいが、音楽的、演出的な意図によって自由に組み替える事が出来る。今回も、全体を１つのパフォーマンスとして構成するために、「酝すり唄」と「数番唄」は2回演奏される。

「酝すり唄」

桶の中に入れた酝を半切でかき混ぜながら歌う唄なので、動作に伴って拍子が複雑になっている。特に、音頭（ソロ）の所は、出来るだけ伝承に忠実に再現したつもりである。

「数番唄」

元々は、水や蒸米を小さな桶に入れて運ぶ時の数え唄。と言っても、節がない（セリフに近い）ので、女声の「唄」として作曲した。辛い単調な作業の繰り返しのためか、いわゆる強烈な「下ネタ」が多く、流石に合唱には馴染まないので、各地の穏便な部分の歌詞を集めている。

「桶洗唄」

「桶が鳴るか、シゴキが鳴るか」という歌詞と共に、印象的な力強さを持つ唄なので、更に重層的に力を増すように作曲した。

「米とぎ唄」

桶の中の米を、素足で研ぐ時の唄。ワインにおける葡萄踏みも彷彿とさせるが、完全に１拍子の曲である。足の左右があるので2拍子と思われがちだが、２拍子は「強・弱」の繰り返しを指す。この場合は右足と左足が、同じ強さで無ければならないため、右も1、左も1、と対等な1拍子である。

「仕込唄」

ここまで来ると、仕事の喜びが感じられる段階である。余裕も出て「酒が見えた」ところを、男声合唱で歌う。

「酝すり唄」（2回目）

ここで、杜氏さんと合唱のコラボレーションをする。新酒と古酒のブレンド、という言い方が相応しいかどうか。伝統の継承は、古いものを記録するためのものではなく、生きた形で、今後につなげようとする試みである。

「数番唄」(2回目)

仕事唄としての酒屋唄は男の世界。しかし、その男達を待っている女性の思いをもう一度。

「三ころ」

すべてが終わりに近づいてくる。春は近い、帰る日も。

今回、この曲の作曲と、地元の皆さんによる合唱団を指揮しながら、しっかり地元に根付いている文化をヒシヒシと感じた。朝日酒造に文化部が存在する事、そして、このような企画が実現される事、そして良質のお酒。これだけのものを一地域に置いておくのはもったいない、などと考えていたら、何とニューヨークでも日本酒が定着し始めている、それも、日本人相手の日本レストランではなく、名シェフが開いているフランス料理のレストランとのこと。お酒が文化を運び、文化がお酒を運ぶ事を喜びつつ、朝日酒造に敬意を表したい。そして、本日、雪の中をお運びの皆様が楽しんで下さる事を、心から願う次第である。

《菅野 由弘（かんの・よしひろ） 作曲・指揮》

東京芸術大学大学院作曲科修了。79年「弦楽四重奏曲」がモナコ・プランス・ピエール作曲賞。94年、電子音楽「時の鏡I――風の地平」がユネスコ主催、IMC推薦作品、2002年、ラジオドラマ「アウラ」でイタリア放送協会賞受賞。主要作品は、NHK交響楽団委嘱の「崩壊の神話」、国立劇場委嘱の雅楽、聲明、古代楽器のための「西行―光の道」(春秋社刊)、聲明とパルサー波によるコンピュータ音楽「虚空星響」(DENON)、NHK委嘱の、オーケストラと雅楽、能管、太棹のための「蜘蛛」、ヴァイオリン、尺八、箏、笙、コンピュータと映像のための「風の都市」、「北斗西流」雅楽、電子音響、ロボットの舞など。

現在、ピアニスト小川典子とミューザ川崎シンフォニーホールの共同委嘱で「ピアノの粒子」三部作が進行中。他にNHK大河ドラマ「炎立つ」、NHKスペシャル「フィレンツェ・ルネサンス」などの音楽。現在早稲田大学教授。

酒を造る里のものがたり

作　嶋　悌司

江戸時代の半ば頃からだろうか。
越後の山あいや海辺では
雪のため　農業や漁業ができない季節が近づくと
男たちは出稼ぎに行った。
江戸の発展とともに需要の増えた清酒産業を興そうと
幕閣たちが競い合った頃のことだ。
そして、越後にその労力を求めた。

美しい紅葉の秋。
だれもが好きなこの季節も、
酒屋もんにとっては気の重い季節だった。
出稼ぎに行く日が近づいてくるから。
山が色づくこの季節になると、いまだに暗い気持が戻ってくる。

酒造りは半年間の勤め奉公である。
気心の知れた一族郎党・集落の人たちで　酒造り集団は作られ
杜氏・頭・役人という職階で　厳しい掟が作られていた。

酒造りは寒冷な気温のもとで進められる。
越後では、昼でも　さして気温は上がらぬが、
関東や中部では　日が昇れば大変だ。
早朝、時には三時・五時ごろ
蔵人たちは身支度して作業に入る。
凍てつくような水の冷たさ。
麹蓋、半切、櫂棒を、ササラで洗う。
酒造りは有害菌との戦いである。
雑菌は許されない。
殺菌の方法などわからぬ時代
掃除、洗いものは徹底的に進められた。

勤め先の酒蔵には　中京であれ、江戸であれ
ひたすら歩いてゆく。
幾日(いくにち)も　幾日も、しぐれの街道を歩き続けた。

良い杜氏、大杜氏の条件といえば
一族郎党に賃金を沢山とってくれる杜氏。
無駄づかいせずに家に持ってくる杜氏。
腕が良く　品評会では賞を取る。
そして、後輩をしっかり育てる杜氏。

寒さの中での水仕事
ぞうりを履く裸足に感覚がなくなる。
気を入れて　覚悟して取り組まないと！
関東は外流しも多いから
元気よく　気合いを入れて走り回らなくては
やってはいられない
「勝負だ！」「急げ！」「ノロノロするな！」

冷たい手足が火照る　汗が出る。
終わった後のさわやかな達成感。

酒屋もんがつとまらん奴は　大した男でないわい。

寒さに勝つ、辛さに克つ
気持ちを奮い立たせて乗り越える
これこそ、男の仕事だ。

関東カラ風　お山は雪だよ
ヨーイガサイサイ　ヨーイガサイサイ

山の向こうには越後がある。
風呂に入る時　夜寝つくとき
一人思い出す　故郷(さと)のこと。
闇から聞こえる雪下ろしの響き
しんしんと降り積もる雪が、
暗闇にほのかな明かりをつける
今年の雪堀りは大丈夫だろうか。

酒屋唄は、蔵で歌う唄
歌う時　故郷を思う。
蔵入り、洗いつけ・・・。
唄ができないと、本当に恥ずかしかった。
腕組みしている杜氏を向こうに見ながら、
必死に唄を覚えたもんだ。
これが唄半給金(うたはんぎゅうきん)。

「流し唄」から始まって「もとすり」まで、
全部歌わないと、箸を持たせてもらえない。
「声が小さいぞ！　そんな声じゃあ酒が腐ってしまうぞ」
杜氏の厳しい声が届く

この土地では二代も三代も　降り積もる雪のように
嫁たちの苦労と淋しさは積もり積もった。
ヨシさんは五十年たった今も
口惜しかったことが忘れられない。
結婚式を終えて一か月
もう出稼ぎにはゆかぬと思っていたのに
夫はギリギリになるまで言わなかった。
明日の朝出かけることを
姑の手前　文句も出さず・・・・
頼りにしているたった二人がいなくなる。
淋しい・・・・。

節分を過ぎると
蔵の小窓から差し込む光が　輝きを増すんだ。
吟醸の華やかな香りが　蔵にあふれた。
三ころの唄が、活気を増す。
こしき倒しも近い。

汽車が長野に入った。
窓の外には、一面にきらきらと輝く白い杏の花。
心が浮き立つほどの美しい花だ。
春は一番好きな季節だった。

バスは故郷に近づいた。
停留所で待つ女房が見える。
半年ぶりに二人並んで山道を歩む。
鶯が鳴く　懐かしい女房の髪のにおい。
カタクリの花の静かさ　真っ青な空。
ああ　故郷では、雲すらも懐かしい。

合唱【酒を造る里のものがたり】

1.酛すり唄

とろりとろりと　とろりとろりと　昔は酒は　とろりとろりと
ハー　とろりとろりと　今する酛は　ハー　酒に造りてヨー　江戸へ出す
ハー　江戸へ出すとは　昔の事よ　ハー　今は世が世で　地ではける
ハー　地でもはける酒　名取りのお酒　ハー　酒は剣菱　ヨー　男山
ハー　男山より　剣菱よりも　ハー　わしが好いたは　朝日山
ハー　今年ゃめでたい　つばめの　鳥が　ハー　扠首の家中に　巣をかける
ハー　めでためでたが　三つ重なれば　ハー　鶴が御門に　ヨー　巣をかける
ハー　どれもどなたも　ここらでチョイと　ハー　チョイとつけましょ　ヨー　長煙草
ハー　男山より　剣菱よりも　ハー　わしが好いたは　朝日山

2.数番唄

かっちりかんと始まった新保広大寺(しんぼこうだいじ)は花笠踊り
日光結構中善寺　有り難いは善光寺
おさんが産して勝手が混雑
四ツ谷　赤坂　麹町　たらたら垂れるはお茶の水
ゴンとついたか明けの鐘　可愛いあの子が目をさます
六千軒　越後高田の城下　雪の降る事日本一
お七可愛いやしずか森(鈴ヶ森)　あったら娘焼き場の灰
板東太郎は利根川の船頭　筏流しの名人
九(きゅ)わぞう猛者　とぼけっつら　おまえの面は般若の面
十日十日の金比羅様　月に三度もあったらよい
十一こんだか迷(め)いこんだ　わたしゃあんたに惚れ込んだ
十二薬師に願(がん)かけて　可愛いあの娘(こ)と添うように
十三あながち(新鉢)まだ早い　十四の春まで待ってくれ
十四あんちゃん色始め　色はついたか血の涙
十五夜さんはまんまるい　釜屋のひねり手にあまる
十六羅漢で働かん　羊羹喰(か)せれば　わしゃ泣かん
十七島田　投げ島田
十八馬頭(ばとう)烏山(からすやま)　色は黒くて目は光る
十九は女(おなご)の大厄(たいやく)だ
二十日と切ってひとわたり渡ってそうろう

3.桶洗唄

イヤー　桶が鳴るか　ヨー　シゴキが鳴るか　桶とシゴキが合えば鳴る
イヤー　声はすれども　姿は見えぬ　ヨーイ　可愛いお方は　ソラーイ　桶の中
イヤー　可愛いお方が　流しの時は　水も湯となれ　エーイサナ　風吹くな
イヤー　洗い下げから　ヨーイ　浄めの桶か　洗い下げなら　ヨーイ　わしが出る　ヨーイ

4.米とぎ唄

ヤレ　荒らしナー　ヨーイ　畑の　（アー　トゲトゲ）千茅と出逢うた
ヤレ　おらもナー　ヨーイ　負けまいヤ　（ヤー　トゲトゲ）洗いとすすぎ
ヤレ　若衆ナー　ヨーイ　とげとげヤ　(ヤー　トゲトゲ)　東が白む
イヤ　館ナー　ヨーイ　館にヤ (ヤー　トゲトゲ)　アラ　鳥が鳴く
ヤレ　若衆ナー　ヨーイ　とげとげヤ　とげとげヤ　これとぎゃ煙草
煙草ナー　ヨーイ　吸わせるヤ (ヤー　トゲトゲ) アラ長々と
チョイト　マカシテ　オナゲダヨ　ヨーイ　ヨイ

5.仕込唄

ヤー　櫂玉揃えて　ヨーイガサイサイ　ヨーイガサイサイ
ヤー　目出度ナー　目出度いヤ　(ハー　ヨーイガサイサイ)　この屋の館
ヤー　黄金ナー　切り窓ヤ　(ヨー　ヨーイガサイサイ)　コレサ銭すだれ
ヤエ　目出度ナー　目出度のヤー　(ハー　ヨーイガサイサイ)　若松様ヨ
ヤエ　目出度ナー　栄えてヤ　(ヤー　これこそ銘酒だ)　コレサ葉も繁る
ヤエ　目出度ナー　目出度がヤー　(ハー　ヨーイガサイサイ)　三つ重なれば
ヤエ　鶴がナー　御門に　(ハー　ヨーイガサイサイ)　コレサ巣をかけた
ヤー　しゅんかナー　仕舞いかとヤ　(ハー　ヨーイガサイサイ)　先からお待ち
ヤレ　これナー　おしゃんかヨ　(ハー　ヨーイガサイサイ)　コレサお目出度い
ヤラエー　ヤラエー
ハー　日光晴天　関東から風　お山は雪だよ　中へと降り込め
アララ　ヨーイガサイサイ　ヨーイガサイサイ
中突いてシャンにしょう　ヨーイヨイ

6.三ころ

揃た揃いました　ノーイヤ　チョイ　アー　一ころ二ころ四ころにたりない
三ころ突きゃ　そろた　中の二三本が　ノーイヤ　よくそろた
竹に雀は　ノーイヤ　あちらの藪から　こちらの藪へと　チュウチュウバタバタ　小羽を揃えて
しなよく止まる　止めて止まらぬ　ノーイヤ　ソリャ　恋の道
竹の切り口　ノーイヤ　しこたんたんと　なみなみたっぷり
溜まりし水は　澄まず濁らず　ノーイヤ　ソリャ　減りもせず
竹の一本橋　ノーイヤ　チョイ　ハァ
細くて長くて　しなしなしなって　あぶないけれども　主となら渡る
落ちてくたばろとも　ノーイヤ　いとやせぬ
落ちてくたばろとも　ノーイヤ　いとやせぬ
いとやせぬ

蔵人の酒屋唄　歌詞

1.流し唄

ハー　　流し出たときゃ鬼かと思た　抱いて寝たれば猫のようだ
イヤー　朝の流しはどなたにこなた　可愛い殿ごのがする
ハー　　越後出るときゃ涙で出たが　今じゃ越後の風も嫌
ハー　　越後出るときゃ褌忘れ　長の道中をぶらぶらと
イヤー　花の三月泣き別れても　菊の九月にまた逢える
イヤー　猫にゃまたたび泣く子にお乳　かわいいあの娘に何やろう

2.桶洗唄

イヤー　桶が鳴るかシゴキが鳴るか　桶とシゴキが合えば鳴る
イヤー　酒屋さんとは知らずに惚れた　花の三月泣き別れ
イヤー　声はすれども姿は見えぬ　かわいいお方は桶の
イヤー　洗い下げから浄めの桶か　洗い下げならわしもでる
イヤー　花の三月泣き別れても　　菊の九月にまた逢える
イヤー　うちのカミさんは花ならつぼみ ござるお客が咲け咲けと

3.数番唄

かっちりかんと始まった、新保広大寺は花笠踊り
日光結構中善寺　有り難いのは善光寺
おさんが産して　勝手が混雑
四谷赤坂麹町　たらたら垂れるは御茶ノ水
ゴンと突いたか明けの鐘　かわいいあの子が目を覚ます
六千軒は越後高田の城下　雪の降ること日本一
お七かわいいや鈴が森　あったら娘焼き場の灰
坂東太郎は利根川の船頭　筏流しの大名人
きわぞう猛者とぼけっ面　おまえの面は般若の面
十日十日の金毘羅様　月に三度もあったらよい

4.米洗唄

ヤレ　とろりしゃらりと今とぐ米は　（ヤレ　造りて江戸へ出す）
ヤレ　江戸へ出す酒　名取の御銘酒　　（ヤレ　剣菱　男山）
ヤレ　男山より劔菱よりも　（ヤレ　好いたか　色娘）
ヤレ　娘島田に蝶々が止まる　（止まるはずだよ花だもの）
ヤレ　花と見られて咲かぬも悔し　（ヤレ　実がなる　はずかしい）
エーヤレ　わしもどなたさんもここらでちょいと　（ヤレ　つけましょ長煙草）　サーエー　返しだー

5.酛すり唄

ハーとろりとろりと今摺るもとは　（酒につくりて江戸へ出す）
ハー江戸へだすとは昔のことよ　（今は世が世で地ではける）
ハー地でもはける酒名取のご銘酒　（酒は剣菱、男山）
ハー男山より剣菱よりも　（わしが好いたは色娘）
ハー娘　島田に蝶々がとまる　（止まるはずだよ花だもの）
ハー早く突け突け東がしらむ　（白むやかたで鳥が鳴く）
ハーやかた屋代で鳴く鳥　軍鶏だ　（軍鶏が三度鳴きゃ夜が明ける）
ハーどれもどなたもここらでちょいと　（ちょいとつけましょ長たばこ）
ハーどれもどなたもここらでちょいと　（ちょいとつけましょ長たばこ）

6.二番櫂

オー　いつも御家例のお風呂の上がり　（エンヤーレ　いつも心がさわやかに）
エンヤーレ　今宵お蔵で今突く添仲留は　（エンヤーレ　酒に造りて江戸へ出す）
エンヤ―レ　お江戸日本橋真中から折れて　（エンヤーレ　諸国諸大名の足止めた）
エンヤ―レ　諸国諸大名の足ならよいが　（エンヤ―レ　可愛いお方の足止めた）
エンヤ―レ　今宵お蔵はめでたいお蔵　（エンヤ―レ　黄金切り窓銭すだれ）
ソーラ　中突いて側突いてシャ―ンにしょう　（俺らも真似して　シャ―ンにしょう）
ソラ　続いて三ころはじまりだ　（俺らも真似して　やろかいな）お願いだ（お頼みだ）

7.三ころ

揃た揃いました（チョイ）
ハァ　一ころ二ころ四ころに足りない三ころ突きゃそろたー　（中で二、三本がよくそろた）

お爺どこ行やる（チョイ）
ハァ　親爺の代から三代伝わる桐の木胴乱　腰に鎌さしてー　（裏のお山へ柴刈りに）

お婆どこ行やる（チョイ）
ハァ　一升や二升　三升や四升
六升に足りない五升樽なんかをおケツの割れ目の
小臭いところにブラシャリと下げてー　　（嫁の在所へ孫抱きに）

竹の一本橋　　（チョイ）
ハァ　細くて長くてじなじなしなって
危ないけれどもおまえと二人で　おててをつないで大阪下りの蛇の目のからかさ
相合うて差し合うて　お口をなめ合うて　渡るなら渡れ　（落ちてくたばろともいとやせぬ）

8.切り火

イヤー　明けの方からカッチリカンと切り込んだるは
玉のような切り火なり　唱礼法身同界
真正面が松尾さん 水神さん 荒神さん 笠間の紋三郎稲荷さん
申し遅れましてはところの鎮守様　お屋敷のお稲荷さん
只今仕込みたるは第一号の添仕込なり
江戸へ出しては江戸一
田舎へ出しては田舎一
千人万人　万々人のご愛嬌のあるように
甘く　辛く
尻ピンとして口中さわやかに　大極上々のご銘酒とならせ給え
イヤー　祓え給え　清め給え　悪事災難不浄除け

注：仕事唄としての酒屋唄は、即興的に歌詞を作って歌うことも多く、一つの曲に多くの歌詞があります。
　したがって、本日蔵人によって歌われる歌詞は、ここに書かれた歌詞と異なる場合があります。

越後の酒造り唄

1. 酒屋唄と酒造り文化

酒屋唄は、一般的には「酒造り唄」とも言われ、酒造工程に沿って蔵人が歌う唄です。歌う目的には、作業を円滑に進めたり、仕事の精度を高めるためなど、いくつかありますが、蔵人(くらびと：蔵で働く技術者たち)にとって、酒屋唄を歌うことは必須条件であり、「唄半給金(うたはんきゅうきん)」つまり給料の半分は唄のためといわれるほどでした。

日本の酒造文化の始まりは上代にまで遡り、古事記にもすでに「酒」という言葉が登場しますが、その頃は濁酒が中心で、清酒が造られるようになったのは室町時代からと言われます。新潟県の中頚城郡(なかくびき)『吉川町史資料集Ⅲ―酒造―』(1994)で見ると、最も古い資料は寛永19(1642)年5月で、在野の酒造り禁止に関する触書が残され、触書を破ったものから酒造道具を取り上げることが記されています。酒屋唄が、清酒の製造が始まったころに歌われ始めたとするならば、室町から江戸にかけて歌い始められたのかもしれません。

現在の酒屋唄の歌詞には浄瑠璃の歌詞も多く含まれています。「数番唄」の歌詞には「一の谷」や「お七可愛いや鈴ケ森」とか、万歳の歌詞も登場します。「一の谷」は浄瑠璃の「一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんき)」(1751初演)から、お七は「恋娘昔八丈(こいむすめむかしはちじょう)」(1775初演)からの引用です。万歳は、『人倫訓蒙図彙(じんりんきんもうずい)』(1690)などにすでに描かれていますので、これらの浄瑠璃が関西ではやり、蔵人たちの移動によって関西から越後に唄が伝えられたことを考えれば、17世紀半ばには酒屋唄が盛んに歌われていたのでしょうか。酒屋唄の始まりがいつ頃からかはまだ分かっていませんが、今後、歌詞を調べるこでわかってくるのではないかと思っています。

全国各地に酒屋唄は残っていますが、関西の丹波杜氏、東北の南部杜氏、そして越後杜氏が有名です。杜氏とは蔵の酒造の最高責任者を意味し、杜氏の下には、三役(頭、麹屋(こうじや)、酛屋(もとや))、下働き(釜屋、酒槽係(ふながかり)、船頭(せんどう)、二番頭、若衆(わかいしゅう)、働き)がいました。歌詞の中にも、「釜屋」の名前はよく登場します。

2. 酒屋唄の種類と唄の特徴

丹波杜氏の唄と越後杜氏の唄の歌詞には、共通の歌詞も多く見られますが、南部杜氏の酒屋唄の歌詞はかなり独特です。丹波では「ヤットコセー　ヨーイヤナ」の囃子言葉で有名な「伊勢音頭」が酒屋唄の歌詞に取り入れられているというのですが、越後でその掛けを使っている唄は、まだ見つかっていませんが、しかし、野積地域の「仕込み唄」に、それらしい旋律とリズムを聞き取れます。

越後の酒屋唄には、大きく2種類の音楽的様式があります。寺泊を中心とする漁師たちが酒造業で歌った躍動的なリズムの様式、頚城地域・三島郡周辺の農業に従事していた蔵人が歌った穏やかな唄の様式です。後者は、旋律の違い、曲目の種類や呼称の違い、作業の動作の違いによって、関東流、朝日流などとさらに細分化されます。

同じ作業目的の唄でも、地域によって名前が異なります。「流し唄」と「洗い場唄」、「米洗い唄」と「米とぎ唄」、「仕込み櫂」と「仕込み唄」などがその例です。また、1990年初め以降の調査では、野積み地域には「桶洗唄」の伝承がないこともわかっています。

現在の唄の種類には、「流し唄」「桶洗唄」「数番唄」「米洗唄」「酛(もと)すり唄」「二番櫂」「仕込櫂」「三ころ」「切り火」など約11種類があります。そして、仕事の始まりに「頭」によって声掛けられる「総起」の声には、日本の唄の原点と言われる神道の「警蹕(けいひつ)」(「オーイ」とゆっくり発する声)と共通する旋律線の特徴を聞くことができます。おそらく、過去にはもっと多くの曲があったと思われます。今回の蔵人の酒屋唄では、「総起」の声も取り入れて、臨場感のある声の世界を再現します。

3. 唄半給金～酒屋唄を歌う目的～

酒屋唄が歌われてきた主な目的には次の 10 種類があります。

①動作をあわせる（酛すり唄、米洗唄、仕込櫂、二番櫂、三ころなど、集団で歌う唄）

酒の酛などを櫂棒（かいぼう）で撹拌する時や、米をとぐ時などに、他の人と動作やテンポを合わせるために歌う。

②仕事の精度を高める（桶洗唄、流し唄など個人で歌う唄）

桶を洗うときなど、歌うことによって体に力が入り、仕事の精度が増すと判断されている。また、声質によって、働いている人がだれかも判断できる。

③量を量る（数番唄など、順番を数えるかけ声）

水やお湯、蒸米などの量を数えるときに、何杯入れたか記憶するために数を読み込んで唱える。

④時間を計る（酛すり唄、米洗唄、仕込櫂、二番櫂、三ころなど、集団で歌う唄）

撹拌の時間を計るために、東海道や中山道などの土地名を歌詞に入れて歌って時間を計る。作業に当たって、作業の責任者は「今日はどこそこまで・・・」と地名で時間の目安を示した。

⑤勤務状態のチェック機能（桶洗唄）

蔵の経営者や蔵人の長である杜氏が、蔵人たちがしっかりと働いているかどうかを、歌う声を聞いて把握する。

⑥安全祈願（切り火）

火打ち石を打ちながら、酒の神の松尾神社に祈りを捧げて、酒造行程の安全祈願をする祝詞（のりと）様式の唱えごと。

⑦眠気を取り払う（すべての唄で、歌詞を自由に作って歌う行為）

繰り返しの労働であることと、早朝から深夜までの、時間を選ばない作業のため、眠くならないために歌う。

⑧寒さを凌ぐ・寂しさを紛らわせる（桶洗唄、流し唄）

冬期のつらい出稼ぎの作業の中で、作業のつらさや家族と離れた寂しさを紛らわすために歌う。

⑨共同体の確認（「酛すり唄」「桶洗唄」など宴会の席で蔵人たちが歌う場合）

酒屋唄は、蔵人という、日本の伝統的な味覚を育ててきた誇り高い技術者の共同体に伝承する唄であり、仕込みが終了したとき（甑倒し）の祝いの時などに、歌われる。

⑩娯楽機能

蔵人が集まる場所では、いつも酒屋唄が歌われる。もっとも良く登場するのは桶洗い唄である。それぞれの蔵人が自分の節やリズムで自由に歌うことが出来る、自分らしい唄が桶洗い唄だからだ。

癒しの声とリズム ～「酒屋唄」の魅力～

茂手木 潔子

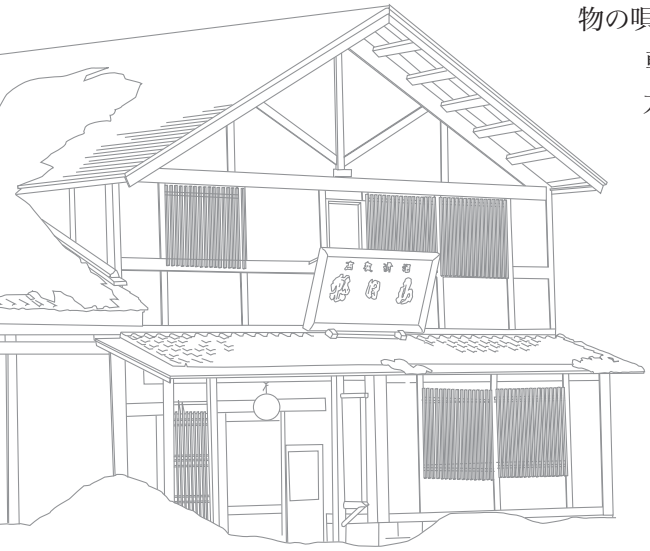
ずいぶん前のこと、音楽を聞かせると酒が良く発酵するという話がテレビ番組で取り上げられ、その時の酒蔵ではベートーヴェンをお酒に聴かせていた。ベートーヴェンの曲が日本の酒に合うかどうかはわからないが、酒造りの伝統的な工程で、蔵人たちが唄を歌いながら作業をしていたことは有名だ。そして、日本は多くの仕事唄を持っていた国として欧米人に知られている。

1990年代、私は新潟県の元醸造試験場長の嶋悌司氏から酒屋唄の素晴らしさを教えられた。時計のない時代、この唄は「唄半給金」と呼ばれるほど酒造作業に不可欠な存在で、撹拌時間を計り櫂棒の動きや米をとぐ足の動きを揃えるための道具だった。さらに、歌うことで家族と離れた出稼ぎの辛さを癒すこともできた。一度聴いたら忘れられないほど、酒屋唄には人の心を動かす力があり、歌う蔵人の姿は魅力的だった。そして何時間聴き続けても疲れない不思議な唄だった。その時、この唄が人の心を癒す唄なのだと確信した。記録ビデオやCDを制作したが、作業唄としての体験のある蔵人は年を重ね、すでに70代半ばを過ぎた。

この素晴らしい日本の仕事唄を何とか残す方法はないか。

昨年初め朝日酒造で酒屋唄を合唱曲にする話が持ち上がり、私が企画をお手伝いすることになった。一般的な合唱曲のように、本来の唄の歌詞に新しい曲をつけ、情緒を残すような作品では酒屋唄にはならない。どうしても酒屋唄の本質を残したかった。そして国立劇場などで、日本の伝統音楽を多く作品化している作曲家の菅野由弘氏が、私の考えに賛同し合唱曲を書いてくださることになった。合唱指導は、多様な声の音楽に精通している山本義人氏。そして、酒屋唄に興味を持った方々が合唱団として朝日酒造に集合した。嶋氏は、出稼ぎする蔵人の想いを文章に作り上げ、「久保田」を世に出した川上杜氏が朗読を引き受けてくださった。

仕事のための唄は、第一に身体の動き、次に遠くまで届く張りのある声、そして言葉の内容の伝達が重要で、メロディーは副次的な存在だ。動作を伴って歌うからこそ、酒屋唄のリズムになる。合唱団の方々は、蔵人の本物の唄を聞いてから自ら体を動かして仕事の拍節感を体験してから合唱に臨んだ。朝日酒造の酒屋唄継承への強い熱意と、そこに集合した素晴らしい方々の尽力のおかげで、前例のないこの企画が実現する。酒屋唄が人の心にやさしい癒しの唄であることを、きっと体験していただけるだろうと思っている。



最後に、本公演のチラシからプログラム作成まで、大変な作業を引き受けて下さった、北海道在住の小川美紀子氏と、この企画の発案から、合唱団の募集、練習のための日程調整など、数々の仕事で私たちを支えてくれた、朝日酒造の西脇美智子氏に、心から御礼申し上げたい。そして、いつも暖かい励ましの笑顔で長期間の映像記録をして下さったバナナプロダクション代表取締役の平澤望氏、無理な頼みを快く聞いて下さって東京から駆けつけ、照明、大道具で舞台をすべて拵えて下さった、高木どうみょう氏、樗沢勇氏、寺田徹氏、そして、この公演を実現するためにご協力くださった皆様方、本当に有難うございました。そして、お疲れさまでした。

《茂手木 潔子（もてぎ・きよこ） 企画・構成》

山梨県生まれ。東京芸術大学大学院修了。現在、上越教育大学名誉教授、有明教育芸術短期大学学科長。酒屋唄への関わりは92年、卒論指導で朝日酒造を訪ねたことに始まる。嶋悌司氏の指導の下、酒蔵従業員組合連合会の新井正和事務局長の協力で、越路・野積・吉川・柿崎の4地域の酒屋唄を調査し、VTR『越後酒造り唄の世界』（頚城村）とCD『越後の酒造り唄』（日本コロムビア）、著書『酒を造る唄のはなし』（頚城村）を出版。また、新潟アジア文化祭、新津市美術館、アサヒビールアートスクエアA、浜松アクトシティホール、ケルン日本文化会館などで仕事唄としての酒屋唄を舞台公演の形で復元。本年4月29日には、国立劇場演芸場（東京都）主催公演として初めて酒屋唄が公開される。主要著書に『文楽』『日本の音　全5巻』『おもちゃが奏でる日本の音』（以上音楽之友社）『浮世絵の楽器たち』（太田記念美術館）などがある。

朝日酒造

酒を造る里のものがたり

監修……嶋悌司（しま・ていじ）
作曲・指揮……菅野由弘（かんの・よしひろ）
合唱指導……山本義人（やまもと・ぎじん）
朗読……川上孝一（かわかみ・こういち）
酒屋唄……朗日酒造の杜氏たち
合唱……越後酒屋唄を歌う会
企画・構成……茂手木潔子（もてぎ・きよこ）
ちらし・プログラム …茂手木潔子・小川美紀子
ちらし風景写真 …鈴木孝枝（すずき・たかえ）
照明……高木どうみょう
新潟照明技研株式会社
舞台協力……樗沢勇（ぶなざわ・いさむ）
寺田徹（てらだ・とおる）
映像記録……BSN新潟放送

発行／2010年2月13日　朝日酒造 株式会社

萬壽
久保田
清酒